

半導体漫遊記

湯之上隆

(291)

前回、本コラムで半導体の3大国際学会の

一つ、VLSIシンポジウム(以下VL)に

おいて、日本の投稿論文数と採択論文数が激減していることを報

じた。今回は、その原因究明を試みたい。

第1に2010年、日立と三菱電機の合併

会社のルネサスがNECと統合し、社員数が

4・92万人に膨れ上がり大赤字を計上し、12

年に倒産寸前となって産業革新機構等

に買収された。その後、オムロン出身の作田久男会

長による激しいリストラなどにより、約3万

人の社員が退職し、現在は1・9万人弱にな

ってしまった。このよ

うな過程でルネサスのアクティビティは低

下しただろう。

第2に12年、日立とNECの合併会社のエ

ルピーダが倒産した。2社の合併による混

乱、02年の社長交代、

12年の倒産、翌13年に米マイクロンによる買

収と、ごたごたが続いて論文を書いて学会発

表するどころではなかつたかもしれない。

第3に、15年には東芝の粉飾会計が発覚

し、歴代3社長が更迭された。その後、東芝

が債務超過に陥り、メモリ事業を売却せざる

を得ない事態となり、

東芝のNAND事業はベインキャピタルを筆

頭とする日米韓連合に買収され、東芝メモリ

を経てキオクシアになった。そして、この買

収が決まるまでは、四日市工場でNANDを共同生産している米WDと東芝が、激しい訴訟合戦を繰り広げることになった。このよう

年生になる時、本人の成績と希望に応じて学費を決める「進学振り分け」が行われる。かつて1990年代は、電気・電子関係工学科は人気が高く狭き門だった

が、2005年にその人が最低となり、希望すればだれでも行ける(必然的に成績が悪い者が行く)学

年生になる時、本人の成績と希望に応じて学費を決める「進学振り分け」が行われる。かつて1990年代は、電気・電子関係工学科は人気が高く狭き門だった

が、2005年にその人が最低となり、希望すればだれでも行ける(必然的に成績が悪い者が行く)学

年生になる時、本人の成績と希望に応じて学費を決める「進学振り分け」が行われる。かつて1990年代は、電気・電子関係工学科は人気が高く狭き門だった

産業斜陽化、優秀学生集まらず

抜本的な人材育成政策を

なごたごたの中、キオクシアのアクティビティも低下したと思われ

る。00年頃、日本のほぼ全ての電機メーカーがDRAMから撤退した

。またITバブルがはじけた01年に、全ての電機メーカーが激しいリストラを行った。このように業績不振で

た。第4に、日本における電気・電子工学科の人気の低下が挙げられる。それは05年に「東大ショック」という事

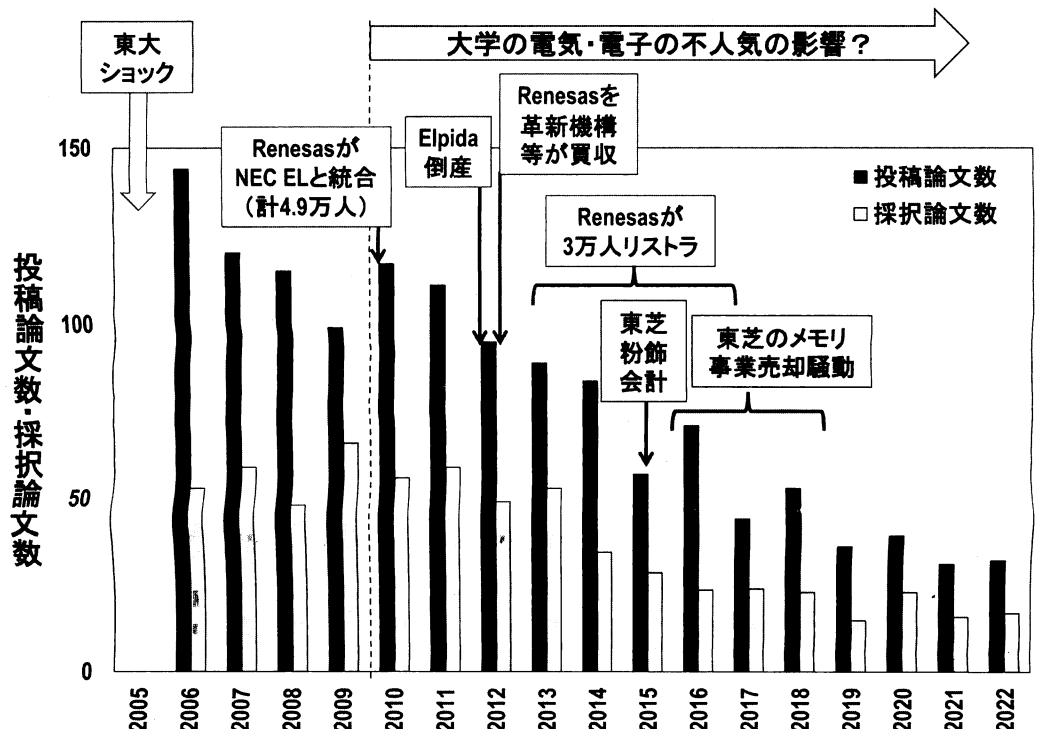
件で発覚した。東大では入学時に「理科I類」のように大枠しか

決めず、2年生から3年

決める。2年生から3年

決める。2年生から3年

決める。2年生から3年



日本のVLの投稿論文と採択論文が減少する原因

び増大させるには、優秀な学生が「半導体関連企業に就職したい」と思わせる土壌をつくるしかない。22年5月10日に第20代大韓民国府が半導体産業を支援

となる。VLの論文数の低下を止めて再